

故郷（魯迅）

市川 奈央子、片岡 文、田中 麻佑子、辻 友葵



一 作者と作品について

魯迅（一八八一〜一九三六）は中国の小説家、翻訳家、思想家である。「阿Q正伝」、「狂人日記」などの作品がある。一九〇四年から一九〇六年まで仙台医学専門学校に留学している。

魯迅は、友人に小説の執筆を勧められたことを『呐喊』の自序に記述している。

たとえば一間の鉄部屋があつて、どこにも窓がなく、どうしても壊すことができないで、内に大勢熟睡しているとすると、久しからずして皆悶死（もんし）するだろうが、彼らは昏睡から死滅に入つて死の悲哀を感じない。現在君が大声をあげて喚び起すと、目の覚めかかった幾人は驚き立つであろうが、この不幸なる少数者は救い戻しようのない臨終の苦しみを受けるのである。君はそれでも彼らを起し得たと思うのか。

「故郷」は、一九二二年に『新青年』に発表された。その後、『呐喊』に収録された。日本では、中学三年用国語教科書の五社すべてに採用されている。国語教科書では竹内好訳の「故郷」が採用されている。

二 叙述について

厳しい寒さの中を、二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、わたしは帰った。

「わたしは」という主語が文末の方にあることで、「故郷へ」が強調されている。また、「厳しい寒さ」から季節は冬であることがわかる。

そのうえ、故郷へ近づくにつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音をたてて、船の中まで吹き込んできた。

船に乗って故郷まで来ていることから、今住んでいる場所と故郷がとても離れていることがわかる。また、今現在わたしは船の上にいる。

苦のすきまから外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。

「鉛色の空」「わびしい村々」といった表現から故郷の様子がよいものではないことがわかる。「横たわっていた」というところからも故郷のぐったりと、すさんだ様子が伝わってくる。

覚えず寂寥の感が胸にこみあげてきた。

「寂寥」は心が満ち足りず、もの寂しいこと。

「覚えず」という表現からわたしが無意識のうち、知らず知らずもの寂しいという思いがこみあげてきていることがわかる。

その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。

考えていることや昔の記憶と、現実の差が大きいと考えられるが、「その影はかき消され」という表現から、昔の美しかった故郷の姿を思い出すことができなくなってしまったとも考えられる。

どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、わたしが今暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。

引っ越すことは不本意であり、現在わたしは異郷の地に住んでいることがわかる。

一緒に住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまったあとらしく、ひっそり閑としている。

一緒に住んでいた親戚がいたことから、この家が大きな家であることがわかる。その反動で、今の空間的な寂しさを表現している。

母は機嫌よかったが、さすがにやるせない表情は隠しきれなかった。

「やるせない」は、どうしようもない、せつない、気持ちに余裕がないという意味。

息子が久しぶりに帰ってきたことによる機嫌のよさだと思われる。しかし、さすがに家を手放さなければならぬような経済状況、暮ら

しぶりにはどうしようもなくせつないという感情を隠すことはできなかった。

わたしを座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引越しの話は持ち出さない。

母はわたしに対して、客のような扱いをしている。久しぶりに会ったからかと思われる。甥の宏児は八歳であるため、二十年ぶりに故郷に帰ってきたわたしとは初対面である。

また、引っ越しの話を切り出すのをしぶっている。明るい話題ではなく、暗い話だからである。

そのころは、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、わたしは坊っちゃんでいられた。

今は「坊っちゃん」ではいられない。暮らし向きも楽ではない。「いられた」という表現から苦勞を知らなかった子供のころを思い出している。また、「父もまだ生きていたし」という表現から、家の経済状況が悪くなった一因に父の他界があるのではないかと考えられる。

ルントーはまた言うのだった。

このころのルントーは身分の差など気にしていなかったためか、非常に饒舌である。心を開いていることもわかる。

こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それまでわたしは思ってもみなかった。

ルントーにとっては日常の当たり前前のことであるが、わたしにとっ

てはそれらがすべて珍しいことである。わたしとルントーの育ってきた環境の違いがよくわかる。

ああ、ルントーは心の神秘の宝庫で、わたしの遊び仲間とは大違いだ。ルントーはただの友達ではない。特別な友達である。しかし、その違いが、育ってきた環境の違いであることに、私はまだ気づいていないのではないか。

また、ルントーはお金を使う遊びではなく、住んでいる環境から自然の中で様々なことを学ぶ心を持っており、その経験をする自由がある。それとは対照的に、わたしは周りの友達も裕福であるため、ルントーとの「遊び」の概念さえもが違っている。

ルントーが海辺にいる時、彼らはわたしと同様、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけなのだ。

「彼ら」とは当時のわたしの「遊び仲間」。

ルントーの眺める空が海辺の広い空であるのとは対照的にわたしや友達の間を眺める空は囲まれた四角い限られた空である。二つの空を比較することでルントーとわたしや友達の違いを明らかにしている。ここでは裕福な環境ではなく、自由な環境を比べている。

別れがつかなくて、わたしは声をあげて泣いた。

わたしとルントーが一緒に過ごしたのは正月のわずかな間だけである。しかし、わたしにとってのルントーの思い出は時間とは比例せずはかり知れないほど濃いものであり、その分だけルントーとの別れが辛かったことが読み取れる。

わたしはやっと美しい故郷を見た思いがした。

故郷を二十年ぶりに見たときは、美しい故郷の長所を言葉にできなかったが、ルントーとの思い出がよみがえったときにやっと美しい故郷を思い出した。つまり、わたしにとっては「故郷＝ルントー」だと考えられる。

「まあまあ、こんなになって、ひげをこんなに生やして。」

ひげを「立派になって」とは表現せず、「こんなに」と表現することで、皮肉、嫌味を伝えている。

わたしはドキンとした。

相手は自分のこと知っているにも関わらず、わたしはその女性が誰なのか全くわかっていない。

ところがコンパスのほうでは、それがいかにも不服らしく、さげすむような表情を見せた。

呼称までもが「コンパス」となっている。これは容姿だけでなく、目の前にいる女性が「コンパス」という金属的な鋭利な道具のイメージにぴったりであったため、心の中でそう呼んだのだと思われる。

わたしは感激で胸がいつぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、「ああ、閨ちゃん——よく来たね……。」

三十年ぶりに再会できたうれしさ、感動があったが、久しぶりすぎるため、またルントーが変わってしまったため、何から話してよ

いかわからずにいる様子である。四十歳近くになつてはいるが、昔の呼び方を用いている。しかし、これは何かを意図してでた言葉ではなく、自然と口に出た言葉であると思われる。

角鶏、跳ね魚、貝殻、獠……だがそれらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆けめぐるだけで、口からは出なかった。

思い出すことはたくさんあるが、次から次へ思い出の単語ばかりが出てきて、文章にならない様子である。なぜ口から出ないのかは自分でもわかっていない。

「だんな様！……。」

昔の呼び方を用いたわたしとは異なり、現在の関係から「だんな様」と呼んでいる。ルントーは子どもどきとは違い、自分の差を理解しているため、昔と同じように接することができないでいる。

わたしは身震いしたらしかった。

「らしい」とは推定の助動詞で、自分で自分のことがはっきりわかっていない様子を表している。それほど、ルントーの発言に対して衝撃を受けている。

悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。

「悲しむべき厚い壁」とはわたしとルントーの間にある身分の差。わたしは昔のように接したいが、ルントーが身分を気にするため、できないでいる。

昔のように、迅ちゃん、でいいんだよ。」と母は、うれしそうに言った。

わたしとルントーの、身分の差を気にするために昔のように会話ができいない様子と裏腹に、母は心底二人の再会を喜んでいる。また、母もわたしと同じようにルントーとの身分の差などは気にしていないようである。

言われて宏児は、水生を誘い、水生もうれしそうに、そろって出ていった。

水生は恥ずかしがりながらもうれしそうである。同世代の子どもに誘われて素直に喜んでいる。また、宏児と水生の姿は昔のわたしとルントーの姿と重ねることができ、昔と現在の二人の関係の違いを強調している。

苦しみを感じはしても、それを言い表すべがないように、しばらく沈黙し、それからきせるを取り上げて、黙々とたばこをふかした。

苦しい生活を強いられることがわかる。苦しみが大きすぎて、言葉にできない、あるいはもう文句や不平を言うことにあきらめを感じている。

母は、持っていかなぬ品物はみんなくれてやろう、好きなように選ばせよう、とわたしに言った。

売ってお金にすると決めていた物までルントーにあげようと母は考えている。ルントーが苦しい生活を送っていたということ、また近所の人との関係とは異なり、わたしや母にとってルントーは特別な存在であることがわかる。

「おじさん、ぼくたち、いつ帰ってくるの?」

幼い宏児は今回の離郷の理由をはっきりと理解していない。またいつかこの故郷に戻ってこられると考えていると思われる。

「だって、水生がぼくに、家へ遊びに来たって。」

かつてわたしもルントーから自分の土地に来るように誘われていた。このような些細なことからも、かつてのわたしとルントーの関係を宏児と水生の關係に重ねている。

わたしも、わたしの母も、はっと胸をつかれた。

宏児の発言から、彼らもわたしとルントーのような悲しい体験をするのではないかと心配している。また、子どもの純粋な質問に対してどう答えてよいのかわからず、少し困惑している。

自分の周りに目に見えぬ高い壁があつて、その中に自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。

目に見えぬ高い壁は身分の差のことを指している。「自分だけ取り残されたように」とは、故郷から二十年も離れていたため、その間の時間の経過により変化してしまつた人たちと自分がずれてしまつて取り残されたように感じていることを指している。

希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。

「新しい生活」とはすべての国民が平等で、みなが自立し、封建制から抜け出した自由な生活のこと。

たしか閩土が香炉と燭台を所望した時、わたしはあい変わらずの偶像崇拜だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑つたものだが、今わたしのいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。

ルントーの偶像崇拜を小馬鹿にしていたが、自分が願っていることも「希望」であるとしているだけで、現在とはかけ離れた考え方をしている。この行為がルントーの偶像崇拜となら変わりのないことに気付いた。

ただ彼の望むものはすぐ手に入り、わたしの望むものは手に入りにくいだけだ。

ルントーが望んでいるものは安定した生活で、お金が手に入れば解決することができる。それに対し、わたしの望むものはみな「新しい生活」をもつことであり、そう簡単には手に入らない。

三 考察

(一) 魯迅の時代背景から見る「故郷」

作品に描かれた主人公「わたし」の故郷の没落、そして退去は、魯迅本人の経験がもととなっている。

魯迅は一八八一年、浙江省紹興府の読書人(昔中国で、学問を積み、科挙を受けて官になった人)の家に生まれた。幼少の頃には暮し向きは豊かだった。けれどもその祖父が一八九三年(魯迅が十三歳のとき)に収賄事件を起こして入獄となつてしまった。さらに父が病気を患つ

て周一家は急速に没落した。そのため魯迅は質屋と薬屋の往復に三年間費やし、その薬代の為に家財はほとんど失われてしまった。けれどもそれもむなしく父は没した。これらは「故郷」が収録されている『呐喊』の自序に書かれている。また本文の「そのころは、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、わたしは坊っちゃんでいられた。」の部分とも一致する。

その後、魯迅は家を出て南京に出て官立の学校に入学、そして卒業後留学生試験に合格した。この頃、日清戦争、戊戌の変法、義和団事件などが続き、中国は半植民地化されていた。一九〇二年、二二歳の周樹人は弱体化する中国には革命が必要であるとして、留学先を日本に決めた。そして一九〇九年、七年間の日本留学を追い、帰国した彼を待っていたのは彼に頼るより他に方法の無い困窮した「家」であった。

そして一九一一年、辛亥革命がおこった。けれども、一九一二年三月、つまり中華民国の政権が孫文（一八六六〜一九二五年）から袁世凱（一八五九〜一九一六年）に移ってからは、政局は首都南京ではなく袁世凱の拠点である北京に向けられるなど、袁世凱の専政が続いた。

このような時代背景の下、魯迅が数々の革命運動を起こしていった。最初に起こした革命運動は、処女作を白話文学として『新青年』に発表したことである。これが一九一八年発表の『狂人日記』だ。『狂人日記』は、狂人が書いた日記という体裁で、古来の儒教道徳、封建体制を鋭く批判したものである。こうして中国国民に、現在の中国政府のあり方を訴えていた。

これらの時代背景を見ると、主人公である「わたし」は魯迅の経験を中心に描かれていることがわかる。またこの作品は単なる幼馴染との

再会・別れを描いたものではなく、当時の中国行政へのメッセージであると考えられる。さまざまな登場人物にその思いを投影しながらも、中国国民へ、これまでの社会を見直し、希望をもって新しい社会を築いていくことを目指していくことを訴えかけた文章ではないか。だからこそこの作品の主題は「国民が希望をもつこと、自立した心を持ち平等な社会をつくっていくことを目指す」ものなのではないだろうか。

（二）「希望」について

本文に次のようにある。

希望という考えが浮かんだので、わたしはどきつとした。たしかルントーが香炉と燭台を所望したとき、わたしは相変わらず偶像崇拜だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑ったものだが、今、わたしのいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ彼の望むものはすぐ手に入り、わたしの望むものは手に入りにくいだけだ。

では、わたしの「望むもの」とルントーの「望むもの」とは何なのか。このことについて考えたい。

文中に「偶像崇拜」とあるが、「偶像崇拜」とは、神仏の姿を象った作りものを宗教的にあがめ、敬うこと。ルントーは「香炉と燭台」をほしがったが、「香炉と燭台」は神仏への祈りに使うものである。ルントーは生きる気力を失い、神仏に祈るしかなく、積極的な行動に出ようとは考えていなかった。しかし、希望を持たないまま何もせずに、ただ神仏に祈っているだけでは、現在の苦しい生活は変わらないので

ある。このような神仏の道具はわたしなど他の人に頼めば手に入れられる。つまり、ルントーの「望むもの」は神仏の道具であり、「すぐ手に入る」ものである。

わたしの「望むもの」＝「希望」は八行目く九行目の「希望をいえば、彼らは新しい生活を持たなくてはならない。わたしたちの経験しなかつた新しい生活を。」とあるように、「若い世代の新しい生活」である。確かにこのような「希望」は手に入りにくい、これも「手製の偶像」にすぎないのだろうか。

「思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。」とある。これは、「歩く人が多くなれば」というのは『努力すれば』ということである。

いろいろな人が道ではなくさまざまな所を歩くと、道はできない。つまりみんなが同じ道を歩くべきだということである。全ての人が同じ目標に向かってひたすら歩くと、道ができる。「故郷」（魯迅／竹内好訳）の教材解釈・門島伸佳より）多くの人々が同じ「希望」に向かって努力すれば、その「希望」は叶うであろうという意味と考えられる。つまり、わたしの「希望」は多くの人々とともに努力することで叶えられるものであり、自分ひとりの力では到底叶えられるものではない。その点でわたしの「希望」も「手製の偶像」にすぎないとしていえると考えられる。また、わたしの「希望」もただ願っているだけでは、諦めて何も行動しないルントーと同じになってしまうということを示している。

